

青年期、思春期。

●ドイツ教養小説
(ビルドゥングス・
ロマン) H・ヘッセ
『デーミアン』『ク
ヌルプ』『シッダル
タ』『荒野の
狼』T・マン『トニ
オ・クレーゲル』
『ジャン・クリスト
フ』等。



ジャック・ケルアック
著 (河出文庫)

●ビート世代
1950年代後半、
内なる「ビート」を
言霊とし、それまで
の因習的な米国に
様々なアンチテーゼ
を起こす。W・パロ
ウズ、A・ギンズバ
ーク、G・スナイダ
ー等に代表される。



五木寛之
(文春文庫)



ン、19世紀のゴールドドーン、等の秘密結社も旅を介しているし、20世紀初頭のドイツ教養小説もそういう感じだ。60年代ビートジェネレーション以後は、ジャック＝ケルアックの『路上』を片手に西海岸へ。パリ五月革命、ベトナム反戦運動を体験した世代は、ポール＝ニザンよろしく、「20才が美しいだなんて誰にも云わせない。」などとわめきつつ、アデン・アラビアへ。『青年は荒野をめざす』片手にナホトカ航路でシベリアへ、70年代は、ラジニーシ『存在の詩』でインドへ導師ハント。『ドン・ファン』シリーズ読んでメキシコへ。80年代は『Be Here Now』でインドや西海岸へ、『深夜特急』読んでユーラシア大陸横断へ。90年代は『アガ스티アの葉』求めて、南インドへ、『聖なる予言』でペルーへ。『ASIAN JAPANESE』でアジアをうろうろ。もお～世界中、うろうろ。

これらに、ほぼ共通するのは、それまでの世界に違和感や疎外感を持った人間が、旅に出て様々なものに出会いながら、自分の精神を高めていくという構造だ。別の本で中沢氏も指摘してるように、これは、グノーシスの神話構造と良く似ている。つまり、“本当の自分を探す旅”の源は古く、もはや、DNAレベルなのではないだろうか？であるが故に、人は、この手のストーリーに弱くつい魅了されてしまう(笑) だから、これらの旅は共通して、ツーリストの旅であってはならず、直接、自分の肌が異文化にさらされるスリリングな時間の旅でなくてはならないのだ。

しかし、中沢氏は、これらの旅が皮肉なことに、ツーリストたちの旅のイメージの単なる裏返しでしかないと指摘する。また、最近では商魂逞しい旅行会社も逆手にとって、秘境やパワースポットで本当の自分を知るツアーなど企画され、あげくの果ては、命を落としたりする。やれやれだ。

★

さて、現代の旅には、別の「旅の哲学」が先述の旅と同時期に出現したと、中沢新一は言う。それは、文化人類学者レヴィ＝ストロースが1955年に出版した『悲しき熱帯』で見事に結実したとされる、「自分の部屋にじっとこもったまま退屈しない人間こそが豊かに成熟した人間だ」というパスカルの言葉に源泉を持つ、「旅に抗う旅の哲学」だ。

60年以後大量発生したアドレッセンスの旅は、ツーリストの旅よりもまだが、その哲学は重要な点でまちがっているとし、自分の外の世界に無垢な原初との出会いを求め、期待しても、それは幻想であり実在してないと言うのだ。旅の冒険は旅人を変えず、お金をかけて広大な空間を移動したあげく、再びもとの自分に着地するだけだと。

つまりヌース的に言えば、“人間の内面”への旅は、何処まで行こうが三次元空間内にしかすぎないと言っている訳だ